



校長会



No.35

三重県小中学校長会 広報 第35号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142 三重県教育文化会館内 TEL 059-227-7011 E-mail mie-kotokyokai@galaxy.ocn.ne.jp
●編集●三重県小中学校長会 広報委員会 ●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1 TEL 0598-29-1234

は、毎日の授業で、子ども一人一人が、

これまでと変わらず続けてきたことは、
鍛え続ける「思考力・判断力・表現力」
 本校では、昨年度までの七年間、算数科の授業研究を重ね、子どもたちが自分で学習を進める姿として、一定の成果が見えてきました。そこで今年度は、国語科に広げようと踏み出しました。

子どもも大人も、目指せる目標を
 これまでの学校でもそうでしたが、私はいつも、学校教育目標は、子どもたちと職員に、そして保護者や地域の人々にも、意味がよく分かるものになるよう心がけてきました。それは、みんながすぐに実行してみようと思えることが大事だと考えたからです。
 同時に、目標を達成したことを子ども自身が実際に感じ取れること、また、周りから見ても、達成した姿が分かりやすいということも考慮しました。そうして、子どもと職員の学校生活への意欲を高め、保護者や地域の人々に学校の活力を感じてもらおうと、願ったのです。

教員全員で進める授業提案・実践研修
 最近、教員が教室の黒板の前に集まり、発問や展開を予想したり相談したりする場面が増えてきました。みんなより良い授業を考え続け、知恵を出し合っている、このことが何より嬉しいこの頃です。

学習内容に向かい、考え、読んだり書いたり話したり聞いたりし、選び、決め、また考える、等々、確実に活動を重ねることです。「わからない」「できない」ということも大事にしながら、思考力・判断力・表現力を鍛えることを目指しています。
 それはまた、高学年が中心となつて進める全校活動でも同じです。テーマ、内容、進め方、必要になる練習も含め、考え、話し合いながら実行させていきます。低中学年の子どもたちは、高学年の子どもが、みんなに分かつてもらおう、みんなで成功させよう、と、全身で表現し行動する姿を目の当たりにして、その力強さを受け継いでいくように思います。

私の学校づくり



わかった、できた、と
 だれもが実感する学校

松阪市立第一小学校

校長 木村 祐子



松阪木綿を着て説明する6年生



今日的課題の克服に向けて

『ドウイタシマシテ』

いなべ市立丹生川小学校

校長 藤井 光 照



学校教育をとりまく課題は、多岐にわたる。学力、体力。特別支援教育に、日本語指導が必要な外国人の子どもへの教育。不登校、いじめ、への対応……。確かに重要なことばかりだ。課題を思うと、あれもこれもと、多忙と疲弊感に苛まれていく学校の姿が頭をよぎる。串団子のように、課題のすべてを突き刺す竹串のような術はないものかと、天を仰ぐ日々である。

私の一日は、学校東門の落ち葉掃除から始まる。猛暑の影響もあつてか、門柱を包み込む桜の枝から、

次から次に枯葉が舞い落ちる。雨上がりに水に浸かった葉から桜餅の香りが漂う。駐車場と玄関先の掃除を終える頃には、額にじつとりと汗がにじむ。そろそろ子どもたちが登校する時刻だ。私は「レレレのおじさん」のように竹ぼうきを揺らしながら、笑顔で子どもたちを迎える。「お出かけですかあ？」ならぬ「おはようございませう」。すべての通学班が通過するのを見届けて職員室に戻ろうとした時だった。一人の女の子が私のそばにやってきて声をかけた。

「コチヨウセンセ、イツモオソウジ、アリガト」

私は突然の言葉に驚いて、

「お礼を言ってくれて嬉しいよ。校長先生こそ、ありがとうだよ」と咄嗟に答えた。すると彼女は、

「ドウイタシマシテ」

とにこやかに返してくれた。

その日から、Aさんとの朝の会話が始まった。学校では日本語、家ではスペイン語で話すこと。日

本語はうまくなったが、漢字はまだ書けない、特に算数は苦手だということ。好物はジャガイモ。両親からいつも、友達と仲良く遊ばなさいと言われていること。日本人の人からお礼を言われたら「ドウイタシマシテ」と頭を下げて答えること……。

Aさんには兄がいる。最近授業に集中せず、教室を抜け出すこともある。学年が進み、抽象的な学習言語に戸惑っていたようだ。「わからない、できない」と言えなかったのだ。

『日本』も『学校』も大好きだと言う一人の女の子のあどけない笑顔から、学校としてやるべき教育の竹串(道筋)がはつきりと見える。・Aさんを含む、すべての子どもたちに確かな学力をつける授業づくり。

・地域や家庭と連携し、やさしさと思いやりのある子どもを育てる教育の推進。

・特別支援教育の充実。

・確かな九年間の学びを実現する小中の連携強化。

あれもこれでもない。目の前の、すべての子どもたちが、Aさんのように「学校、楽しい」と言ってくれる、そんな学校を教職員み

んなでつくることだ。

運動会が終わり、Aさんの学級に女の子が転入してきた。Aさんと同じ外国籍。二人の家は隣どうしで、仲良く手をつないで登校する。

竹ぼうきを持つ私の姿を見つけると、二人は駆け寄ってきた。いつものように私がお礼を言うのと、転入してきたBさんが、恥ずかしそうにうつむいて呟いた。「ドウイタシマシテ」。

『読解力』と『表現力』の向上をめざして

志摩市立甲賀小学校

校長 倉谷 良 正



「言いたいことがあってもうまく言えない」「どのように伝えればいいのかわからない」。三年前、学力向上をめざし授業改善に取り組む中で、児童のそんな実態が浮き彫りにされてきました。

さらに、全国学力・学習状況調

査からは、「国語科において段落ごとの内容を理解しながら読んでいく児童が少ない」ことがわかってきました。

このような課題を克服するために、説明的文章の読解を中心にした国語科授業の改善に取り組み始めました。

「児童の身の回りには説明的文章があふれている。それらを正しく読み取る力を高めていくことが、生活を豊かにしていくことにつながる」との仮説を全教職員で共有し、研究が始まりました。

これまでの研究を通じて、特に配慮してきたことや新たに発見したことを次に挙げます。

- (1) 学習課題を明確にしたワークシートを作成し、効果的に活用できる方法を考案する。
- (2) 教材全文体を書いた模造紙を教室内に掲示し、日常的に説明文にふれる環境を作る。
- (3) 指導重点事項の抽出と系統性の検討を行い、一覧表を作成し活用する。
- (4) 話し合い活動の活性化をはかり、思考を深めるための手立てを工夫する。
- (5) 学習規律の定着と教師の指導技法や指導姿勢の点検・評価

を行う。

ひとつひとつを詳説することは紙幅の関係で、できませんが、例えば(2)の教材全文の掲示について言えば、ある説明的文章の指導時間中は、常時教室に全文を書き写した模造紙を掲示しています。これは、必要に応じて書き込みや付け足しを行うためだけでなく、段落間の関係に着目し論理構成に着目する活動のために必要なのです。活動を通じて、児童は、「最後の筆者の言葉は、最初の段落の問いかけに答えているみたいだ」「二段落と三段落は、反対の内容だ」など掲示物の文を指し示して説明できるようになってきました。全文を掲示しているからこそできることです。

また、(5)の教師の指導技能や指導姿勢の件ですが、授業において、同じ発問の繰り返しはないか、考えさせる時間は十分とっているか、児童の思考を深めさせる手では工夫されているかなど、当たり前だけれども、強く意識しておかないとおざなりになってしまうようなことを互いに点検し合っていく。これを大切にしていこうと。

そして、忘れてはならないのは授業研究を深めるための体制を構築

築できてきたことです。

本校では研究の始まりから大学や県・市の教育委員会の支援を受けてきています。

国語科教育の専門家や経験豊かな学力向上アドバイザー、指導主事から指導・助言をいただくことにより、新しい理論・方法を知ることができたとし、理論を実践につなげることができてきました。

まだまだ「読解力」「表現力」ともに研究途上ですが、子どもたちの論理的に思考していこうとする態度や他者の意見に耳を傾け、その表現に関心を寄せることなど好ましい学習成果が最近みられるようになってきたように思います。

「地域と一体となった学校」と「学力の向上」を目指して

孤野町立八風中学校

校長 北口 幸 弘



昨年の年度途中から、「八風中学校の学校運営に関する協議会」

を立ち上げました。昨年度は六回、本年度は十一月時点で八回の協議会を開催しました。委員は、学校評議員、区長会代表、PTA代表、主任児童委員の方々十一名と、中学校二名の計十三名で構成しています。

年度当初には、学校の教育計画を説明し、年度末には学校関係者評価を行っています。協議会は基本的に授業日の午後、最初に校内の授業や生徒の様子を見ていただき、その後、気になる点や学校の課題等について協議をしていただいています。

当初から、「学校のために辛口のご意見もどんどんいただきました」ということで進めてきました。が、そのためには何度も学校へ来ていただき、学校全般について知っていただく必要があります。そのため、学校を常にオープンにし、いつでも見ていただけるようにしています。

その他にも、入学式、授業参観、体育祭、学校開放週間、部活動参観、生徒会立会演説会、音楽集会、文化祭、教育講演会、卒業式等にもご来校いただき、学校、教職員、生徒の様子を見てもらっています。

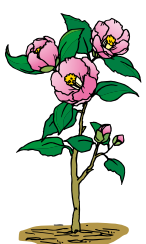
協議会を進めていく中で、生徒や教職員のあいさつ、学校の連絡体制、交通マナー、授業態度、休み時間中の指導体制、地域での生徒の状態や問題点等たくさん指摘をいただきました。出された意見をその都度教職員にも伝え、一つ一つの事柄を丁寧に誠実に対応しながら、地域・保護者・生徒との信頼関係を構築していくように進めてきました。

その結果、最近の協議会では、「先生も生徒もあいさつがすばらしい」「学校が本当にきれいになってきた」「授業態度も非常に落ちてきた」「合唱コンクールの態度で学校が良くなってきた」「ことを実感できる」といった意見をいただいています。学校では常に課題を明確にし、課題解決に向けて取り組もうとしています。が、いくら一生懸命に取り組んでも、中にいる者では気付かないことや、学校では常識とと思っていることが、実は生徒や保護者にとって不親切な対応であること等、外部から学校を見た意見は非常にありがたく、謙虚に受け止めて改善していくように努めています。これは、学校の品質向上に大きく繋がっていくと考えています。

幸い本校はPTA活動が盛んで、年間を通して各種学校行事への協力の他に、PTA見守り隊、広報活動、PTAバザー、教育講演会等様々な活動で学校を支援していただいています。また逆に、地域の行事等に、生徒を積極的に参加させるようにし、地域からも喜んでいただいています。

このように、PTAや地域の方々の力を借りながら取り組むことで、学校がだんだんと落ち着き、問題行動や不登校も減少してきている現在の最大の課題は、学力の向上という点です。本校では、「学びの共同体」に取り組む五年目を迎えています。が、学力調査の結果等において、まだ大きな成果が得られていません。

しかし、本校教職員の協力体制、誠実な対応等、一丸となった姿勢には本当に素晴らしいものがあります。教職員に感謝しながら、「地域と一体となった学校」「学力の向上」に取り組んでいきたいと考えています。



全連小三重大会報告

夢と絆

そしてイノベーション

津市立修成小学校

校長 鈴木 繁 美



一 はじめに

第六十五回全国連合小学校長会三重大会が、十月十七、十八日に三重の地で六十年ぶりに開催された。新しい大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進」のもとに協議を行う最初の大会であった。

また、本県校長会が、一人一役の全員体制のもと、総力を結集して運営した大会でもあった。

二 行政説明

文部科学省大臣官房の義本博司審議官から、今、注目されている教育課題についての説明があった。

特に、道徳教育の充実、土曜授業に関する検討、小学校英語の教科化、今後の全国学力・学習状況調査、いじめ防止等のための基本

的な方針、教育委員会制度のあり方等について、文部科学省の考え方や施策についてくわしく説明が行われた。

三 全体会

大会運営委員紹介の後、全連小本部から、総会、研修会等、主な活動について報告があった。

続いて、大会主題・研究課題の趣旨説明が行われた。新大会主題にせまるため、教育における不易と流行を見極めつつ、副主題を豊かな未来を切り拓き、夢に向かい、共に生きる子どもが輝く学校経営の推進」とし、キーワードを「子どもの未来を拓く教育のイノベーション」とするとの考えが示された。その後、大会主題と副主題、研究領域と研究課題の趣旨説明があった。

四 大会宣言決議

研究主題と三重大会の副主題を基盤に、小学校教育の推進に全力を傾注し、国民の信託に応えるため、八項目の決意が決議された。

五 シンポジウム

「輝く未来への 夢と絆 そしてイノベーション」をテーマとして、日本電気(株) 宇宙システム事業部プロジェクト推進部プロ



ジェクトディレクターの萩野慎二氏、(株)モビリティランド代表取締役社長の曾田 浩氏、マジシャンの原 大樹氏の三人が夢や希望について熱い思いを語った。

「しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程を目指して」
く有意義だった
全国の校長先生方との交流

南伊勢町立宿田曾小学校

校長 高 林 寿



第四分科会では、まず二本の研

究発表がありました。

岡山県高尾小学校では、ICTを日常の教育活動にソフトウェアをデイングさせるという、新たな試みが行われていました。タブレットPCを有効に活用した大変意欲的、先進的な取組でした。

職員の「非日常的なICT教育」から「日常的なICT教育」への意識改革をしながら進める校長のリーダーシップは、大いに学ぶべきところがありました。

続いて、福井県名田庄小学校の研究発表では、確かな学力の育成を目指して教育課程改善を行う際の「校長のあり方」を問うものでした。

学校がこれまで積み重ねて成果を上げてきた教育活動を大切にしながらも、新校長として目標を明らかにし、価値付けし精選した重点目標の柱を打ち立てていくエネルギーは相当なものであったと予想しました。職員の意欲と多忙感のバランスに気を遣いながらも、校長として強い信念を持って「集中と選択」に臨まれている姿勢は、大変すばらしいものでした。

研究発表の後、グループ討議が行われました。

討議のキーワードとなったのは「意識改革」の重要性でした。このことは校長として皆さんが共通して感じられていたことでした。

多岐にわたる話し合いがされま

したが、その中で職員の「意欲と多忙感」が話題にのびりました。研究発表のあった学校でも、精神的な職員の勤務の裏側には、多くの時間外勤務の実態が報告されました。

分科会のテーマにもある「しなやかな知性と豊かな創造性」を求めて、様々な取組をする時、職員の勤務の実態との兼ね合いは難しいものの、多くの校長先生方が力強いリーダーシップのもと頑張っていることに勇気をいただくことができました。

全国の初めてお会いする校長先生方ですが、共通する課題や悩みも出し合うことができ、大変すばらしい分科会となりました。ありがとうございました。



全日中福井大会報告

第六十四回

全日中福井大会に参加して

四日市市立西朝明中学校

校長 吉 本 齊



台風二十七号の影響が心配されたが、全国各地から集まった二千余名の会員で会場は全ての席が埋め尽くされていた。

本大会は「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え、社会において自主的に生きる日本人を育てる中学校教育」を研究協議会主題として行われた。

初日の全体会では、文部科学省大臣官房審議官の義本博司氏による「文部科学省説明」が行われた。本大会のために製本された百三十頁にも亘る冊子をはじめ、三冊の資料を基に教育課程や教員定数改善等五点について、国の動向等について説明が行われた。

教育再生実行会議等最新の情報満載の話であったが、説明後半部

で義本氏が口にした「初等中等教育において中学校は要である」と言う言葉に国・文科省の期待を強く感じた。

続いて行われた全体協議会では、全日中提案として「全日中教育ビジョン改訂の経緯について」総務部長の松岡敬明氏より「提言①」から「提言⑩」までの各提言について、加筆・変更点等について説明があった。そして、最後に今後の学校経営の方向として四点が挙げられたが、その中の「夢を語る生徒の育成」と言う言葉が胸に響いた。

第二協議会の地区提案では「人とかかわり合いの中でより良い生き方を求めて意欲的に学ぶ生徒の育成」として、鳥取県八頭町立八東中学校長の加藤邦雄氏より実践発表があった。

それは、生徒たちの実態把握のもと、三年間のストーリーを考えた、そのゴールとしての三つのつきたい力（課題解決力の育成「コミュニケーション力の育成」「自己理解力の育成」を設定し、総合的な学習の力「カリキュラムの再開発を行い、生徒の変容を促す取組であった。」「学校で学んだことが、

地域の中で発揮されれば、本物になる」と、副題で掲げられているように、地域の活性化を目指したものであり、管理職の熱と力が良く伝わってくる非常に魅力のある実践発表であった。



全日中福井大会 第七分科会に参加して

桑名市立光陵中学校

校長 高 木 達 成



十月二十三日～二十五日にかけて全日中福井大会が開催された。

本稿では、私が参加した第七分科会「教師力の向上を目指した研修の充実」について報告したい。分科会では、提案二つとそれに対する協議、全日中役員による講評という形で進められた。

一つ目の茨城県大野中の佐々木校長による提案の要旨は、①「学校の課題と取組の方向性を明確化する」、②「①に対する実践の自己評価票を各教職員に作成させる」、③「②に校長の評価を加えて作成した個人カルテを基に、各教職員の取組への激励や適切な指導・助言を行う」であった。

協議では、「キャリアに応じた評価・指導が必要である」、「教職員が多い学校では、きめ細やかな評価を行うために教頭の活用が重要である」等の意見が出された。講評では、「実践自体が研修となる」、「カルテなど具体的で分かりやすい評価が人材育成につながる」等が示された。

二つ目の群馬県東中学校の加藤校長による提案の要旨は、①「小規模校が多く、統廃合が進行している背景もあり、郡中学校長会で校内研修の現状や課題を把握し、共通課題や校長の具体的な役割等を明確化している」、②「教科単位の研修が困難なため、①を踏まえた、教科の枠を越えて学び合う研修に取り組んでいる」であった。

協議では、「教科としての研修が困難な小規模校では、学校間で協力して研修を行う必要がある」、「若い教職員が多い学校では、校内研修だけでは限界がある」等の意見が出された。

講評では、「郡単位で課題を把握し、共通理解の基で各校が実践を進めていることは素晴らしい」、「地域として協働すること、より効果的な研修の高まりが期待できる」等が示された。

個の向上を中心に提案された大野中、組織的な取組を中心に提案された東中、両校の提案の切り口は異なるが、根底にある考え方は、力量ある個の育成と組織力向上が相互に作用する車の両輪であるという点で共通していた。我が校の研修改善の参考にもなり、参加の機会を戴いたことを感謝したい。



県教育委員会との 懇談会

「学力向上」「土曜授業」
を中心に

平成二十五年十月三日（木）
於…教育委員会室

【稲垣会長挨拶】

教育長はじめ県教育委員会の皆様には、公務ご多忙の中、このような時間をとっていただき、また三重の教育について話させていただく機会をいただきありがとうございます。

教育を通して子ども達の幸福を願う私たちは、この機会を有意義なものにしたいと考えています。

【山口教育長挨拶】

三重県小中学校長会の皆さんとは、市町教育委員会の所管ということもあり、意思疎通の機会が少ない状況があり、このような貴重な機会を得られることを大切にしたいと考えます。限られた時間ではありますが、よろしく願います。

【懇談】

（一）学力向上の取組と県民運動について

本年度の全国学力・学習状況調査結果については、全国との比較

では、以前から継続して平均を下回っており、危機感を感じている。県教育委員会と学校現場が一緒になって取組を進めていく必要がある。

今回の調査結果からは、小学校の児童、中学校の生徒ともに「家庭での学習習慣等」に課題が見られる。学校においても「組織的、継続的に取り組む授業改善や、学校体制の確立」に課題が見られる。

全国学力・学習状況調査結果を踏まえた授業展開について、具体的な改善事項を示しながら、市町教育委員会とともに各学校による授業改善の実践につなげていきたい。

みえの学力向上県民運動については、三つの視点（①主体的に学



び行動する意欲、②学びと育ちの環境づくり、③読書を通じた学び）の下で、学校・家庭・地域の各主体による取組が進められている。今後はさらに、県民運動の周知・啓発を進めていきたい。

○学力調査の問題は、素晴らしい問題ではあるが、朝から四時間続けてやるというのは、集中力も必要で、子どもは大変である。

○学力の二極化が進み、上位と下位の差が大きくなっているが、下位の児童・生徒に視点をあてて取り組んでいく必要がある。

○先生が変わらなければ子どもは変わらない。県の学力向上アドバイザーを活用し、授業改善に努めていきたい。

○「授業改善モデル」とともに、全国学力・学習状況調査結果からの課題に対応した「ワークシート」の作成を進めている。

○学力は一律には伸びない。家庭学習のための課題を視野に入れながら、保護者とともに、やりがいや達成感を味わえる学習習慣を身につけさせていく必要がある。ただ、家庭によっては、親の帰宅が夜八時や九時になるという家庭もあり、課題がある。

○教員の年齢構成は、五十歳代の教員が半数以上あり、五年後、十年後を見据え、若手教員を育てていく必要がある。

○地域に図書館が少なく、学校の図書室も含めた、子どもが自由に読書に親しめる環境づくりに努めていく必要がある。

○三重県の教育の信頼を高めていくためにも、一定の結果を出していく必要がある。学力向上県民運動は、いわば漢方薬のようなものであつて、速やかな学力向上には、ひとえに教員の取組に期待される。行政と三重県小中学校長会と連携を図りながら取り組んでいく必要がある。



よう、学校教育法施行規則の改正を行う」とあり、今後、三重県としての方向性を示していく必要がある。

○国の保護者に対する調査では、小学生の土曜日午前中の過ごし方で一番多いのは、テレビやビデオ視聴、ゲームをしている割合で半数を占めている。学校における土曜日等を活用した教育の在り方について検討していく必要がある。

○県教育委員会との懇談会は有意義であり、今後ともこのような機会を継続していただくようお願いしたい。



（二）土曜授業について

○文部科学省の「土曜授業に関する検討チーム最終まとめ」では、「設置者の主体的な判断で土曜日に授業を実施することが可能である旨がより明確になる

出席者

県教育委員会

教育長

山口千代己

副教育長

真伏 利典

学習支援担当次長

白鳥 綱重

研修担当次長

西口 晶子

教職員・施設担当次長

信田 信行

小中学校教育課課長

鈴木 憲

教育総務課課長

荒木 敏之

市町教育支援・人事監

原 英雄

子ども安全対策監

倉田 幸則

県小中学校長会

会長

稲垣 隆

副会長

下村 純也

鈴木 豊嗣

奥井 準次

星野 邦雄

藤林 敏治

学校経営委員長

中井 克佳

副委員長

新家 厚志

広報委員長

相樂 浩也

副委員長

星崎 隆弘

県小中学校女性校長教頭会会長

米倉多賀子

事務局次長

近田 芳久

事務局次長

小椋 猛

中川 正生

ちよつと
いい話

心の余裕

四日市市立富田小学校
校長 倉田 文 美

必要に迫られて、わが家のリフォームのための片付けをしていたところ、たくさんの現像されたポジフィルムが出てきた。

私がポジフィルムを知ったのは、もう何年も前に、文化財保護の仕事にかかわっていたときである。

遺跡の発掘調査では、調査によつて壊される遺構や遺物をより正確に記録保存するために、見た目の色を再現してくれるポジフィルムが使用された。一般に使用されるネガフィルムは、プリントの段階で色の補正ができるが、ポジフィルムはそうはいかない。一眼レフカメラさえも使ったことのない私には、適正な露出に調整しての正確な記録写真撮影は、まさに

修行であった。

しかし、一方では、露出やシャッター速度を変えることで「自分の写真が出来ることに、おもしろさを感じるようになった。そして、じつと眺めていたいのものを撮りに出掛けるようになった。

同じものでも、レンズを通すと見えてくるものが違った。逆に、レンズを通してものを見ると、人の目の優秀さにも気づかされた。風が止むまで待つ。

太陽の方向が変わるまで待つ。いろいろな表情をみせる「相手」に魅せられてシャッターチャンス待ち、あつという間に時間がたつた。そんな時間の過ごし方ができた。

しかし、この頃はといえはどうだろう。久しぶりに対面した現像フィルムを光に照らしながら考えた。

今使っているカメラはデジタルカメラ。自動でベストコンディションをつくれるカメラである。しかも、ほとんど仕事で使うのみである。忙しい忙しいと心に余裕のない毎日を送っている今の自分。

リフォームを終えたら、ここ数年の間、保管庫に忘れさられていたフィルムカメラをぶら下げて出かけてみよう。そして、ゆっくり、じっくり「相手」を見つめ、ゆったりと時間を過ごしてみよう。ポジの発掘は、私にとって今を

振り返るちよつといい話であった。

持て成し

鳥羽市立鏡浦中学校
校長 中村 昌 弘

まだ残暑が厳しい九月七日の早朝、いつもの犬の散歩に出かけることも忘れテレビの特別番組を見続けていた。特に気に留めていた訳でもないが、柄にもなく早朝、いや深夜から東京五輪決定の瞬間を待ちわびていた。東京不利という情報が交錯しており、私だけでなく多くの人々が気を揉んでいたと思う。その瞬間はなぜかあつかなかったものの、東京五輪が決定した。歓喜の表情がTVに映し出される。私も手をたたいていたと思う。確かに、東京五輪招致について、震災復興や原発事故などの問題もあり、様々な意見や主張のある重要な課題である。しかしながら、二〇二〇年の夏季オリンピック・パラリンピックの開催地が東京に決定し、五十六年ぶりの開催となり、日本全体が大きく盛り上がり上がっていることは喜ばしい。

東日本大震災からの復興、そして、デフレ不況に長らく苦しんできた日本そのものの再生の動きを加速させるブースターとなるように祈りたい。何か久しぶりに、日本中で自然に笑みが出るような感動を共有出来たことを素直に喜びたい。総会でのすばらしいプレゼンテーションも忘れることが出来ない。これほど国民の熱意や関心が高まったことも、過去の誘致ではなかったと思う。TVのインタビュで子どもたちが「選手として出場したい」「通訳としてボランティアしたい」と生き生きと答えている。多くのアスリートたちの招致活動を通じて、オリンピック・パラリンピックについての理解が深まっているのだと思う。私の世代は、一九六四年の東京五輪世代である。十月十日の開会式の澄み切った青い空、日本選手団の赤いブレザー、ブルーインパールの五輪の輪に、日本中が歓喜したことを記憶している。

忘れかけていた朝の散歩に、愛犬とともに出かけた。いつものように墓地へ向かうと、すでに友人が、散歩途中に我が家の墓前で亡き母に手を合わせてくれていた。東京五輪音頭をともに運動会で踊った同級の友が、「東京やな、良かった」と一言。「おもてなし」の言葉が蘇ってきた。

地区校長会だより

津市小学校長会

津市内の小学校は五十三校あり、これに三重大学附属小学校を加えた五十四校で津市小学校長会を組織しています。

津市は、伊勢湾の海岸部から奈良県境の山間部まで東西方向に広がっており、地域ごとに自然環境歴史や文化が異なっています。平成十八年の市町村合併後、津市として一体感のある教育の醸成に努めながら、それぞれの地域の特色ある教育活動を推進してきました。

小学校長会は、二十一校ある中学校と合同で毎月一回定例会を開催しています。それぞれの学校の特色や課題は異なるものの、津市小中学校長会として課題意識の共有を図り、組織力の向上と活動の活性化を図ることを大切にしています。七十五名の小中学校長が一堂に会し、教育について熱く語り合う姿はなかなかの圧巻です。

また、小中学校長会では自主的な活動の場として委員会活動を取り入れ、すべての校長が次の六つの

委員会のいずれかに属し、今日的課題の解決に向けた活動や研修を活発に行っています。

- 教育課題検討委員会
- 研究大会推進委員会
- 人事委員会
- 予算委員会
- 評価制度委員会
- 学校経営品質委員会

小学校長会では、講師を招聘して研修会を行ったり、小グループに分かれて共通のテーマで討議を行ったり、各校の課題を出し合っ



て論議したりすることで、校長自身の力量向上と津市の教育のさらなる充実と発展を目指しています。

名張市中学校長会

互いの連携・絆を大切に

名張市は、本年度、市制六十周年を迎える人口八万人都市です。現在中学校は、名張、赤目、桔梗が丘、北、南の五校で、生徒数は約二千名です。

名張市では平成二十二年十月、夢をはぐくみ、心豊かで、いきいきと輝く「ばりっ子」をめざし、市民みんなで子どもの教育環境を整えるための総合的な計画として、「名張市子ども教育ビジョン」が策定されました。また、平成二十四年四月には「名張市教育センター」が設立され、児童生徒の学びや発達の支援、教職員の研修、さらに教育相談等の機能を備え、本市がめざす教育を支援する活動拠点となっています。

中学校長会は十七校ある小学校と合同で、毎月一回定例開催しています。市教委からの所管事項を含む全体会の後、校種別に部会を行い、中学校における課題や各校

の取組について、協議や情報交換を行っています。

確かな学力・進路の保障、人権意識の高揚や仲間づくり、積極的な生徒指導など、さまざまな取組が求められるなか、気軽に情報交換や相談ができ、ヒントや元気をもらえる中学校長会のつながりは大きな心の支えになっています。

また、中学校区ごとに、小中学校長会を開催したり、授業参観や出前授業、実践交流や合同研修などを実施したりしながら、小・中学校の連携を密にしています。さらに、市内県立高等学校校長との懇談会を年四回実施し、情報交換や意見交流を行っています。

今後も、名張市中学校長会は、相互の連携や絆を大切にしながら、共通する諸課題の解決に努め、名張市中学校教育の振興を図ってまいります。



原稿募集

会員の皆様の投稿をお待ちしています。なお、内容・字数等につきましては事務局へお問い合わせ下さい。

●「校長会みえ」について、「意見・ご要望があればお聞かせ下さい。」

三重県小中学校長会
広報委員会

編集後記

三重県小中学校長会広報「みえ」の第三十五号を発行するにあたり、執筆を依頼させていただいた先生方には、大変お忙しい公務の中、すばらしい原稿を執筆していただき、誠にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

今年は全連小三重県大会が伊勢・鳥羽の地で開催され、成功裏に終了することができました。また東陸中三重大会を来年度に控え、現在その準備に奔走していただいております。三重県小中学校長会の真価が問われるこの時期、見事に本県校長会の底力と団結力が証明されました。

さて今号では、各校長会の取組の他に、前述の全連小三重大会、全日中福井大会の報告や、県教育委員会との懇談についても詳しく掲載いたしました。

この会報が、学校の課題に真摯に向き合い、努力を続けておられる校長先生方の力になれば幸いです。今後とも、ご支援ご協力をよろしくお願いいたします。